

目的 演者らはヒトの幼少年期より老年期に至る加齢現象の中で、どのような食味嗜好性の特徴が見られるのかを、同一時点および経時的調査を行い、比較検討した。

方法 6~79歳の各年齢層の男女20/10名については昭和63年に、次に昭和43年当時20歳であった女子103名については、昭和53, 58, 63年の3回にわたり食味嗜好調査を行った。それら両資料結果の解析には、平均値の差の検定ならびに多変量解析法を適用した。

結果 1)男子では青春期に甘味嗜好度の低下ならびに塩味嗜好度の上昇が認められ、中・高年期でもこの傾向は続くが、老年期には逆転傾向を示した。加齢とともに酸味嗜好度の低下が見られた。2)女子では男子に比してこれらの現象は緩慢であったが、同様な嗜好曲線が得られた。3)同一対象群の経時的变化でも、甘・酸味嗜好度の低下・塩味嗜好度の上昇が見られた。4)各年齢層別の18群の食味嗜好度を変量として数量化Ⅲ類による分析結果、上位2個の固有値は0.493, 0.132であった。2次元空間上で(若年層男子), (小学生男女・若年層女子), (中年層男子), (中年層女子・老年層男女)の4クラスターの嗜好パターンに分類され、若年層男女は甘・酸味嗜好, 中年層男子は塩・苦味嗜好, 中年層女子・老年層男女は甘味嗜好となっていた。5)同一対象群の経時的4群を変量とした分析結果では、20歳の嗜好パターンと30, 35, 40歳のそれとは異なっていることが空間布置から観察された。6)経時的調査の20, 30, 40歳の嗜好は、同一時点調査の20, 30, 40歳のそれと類似パターンであることが示唆された。